九州地方の縄紋中期土器編年と^{14}C年代

高瀬 哲郎・徳永 貞紹
佐賀県教育委員会

1．はじめに

考古学における遺物の型式学的研究，とりわけ土器の編年は，相対年代ではあるが年代決定の重要な方法であり，遺跡や他の出土遺物の時期を示す精緻な物差としての役割を果たしている。しかし，全ての時代や地域において土器編年が確定している訳ではなく，新たな発見や研究の進展によって従来の説が大幅に修正される事態もありうることである。最近，九州地方における縄紋中期土器編年を巡って，今までの説とは大きく異なる年代観が提出され始めている。以下に，九州地方の縄紋中期土器についての修正案を述べ，土器編年とは原理や方法において全く異なる年代決定法の一つである^{14}C年代との対照によってもこれが支持されることを示したい。

2．従来の説と問題点

1916年の阿高貝塚の発掘調査に始まる九州地方の縄紋中期研究において，「阿高式土器」は常にその中心的な位置を占めてきた。従来の編年観を代表するのは，縄紋時代中期には，九州在地系の並木式・阿高式土器が九州西半部に，瀬戸内系の船元式土器が九州東半部に地域を異にして分布し，両者は同時期でありながら異系統の土器文化圏を形成していた，とする前川（1969）と田中（1979）による研究である。論の細部を別にすれば，いずれも，①並木式・阿高式は前期後半の曽畑式に後続し，その系譜を引くものである，②九州西部における中期の土器は並木式・阿高式であって，船元式系土器はこの地域には主体的に分布しない，という基本的な考えで一致している。逆に言えば，もしもこの二つの前提条件が誤っていれば，両者の説は共に成立しない訳である。

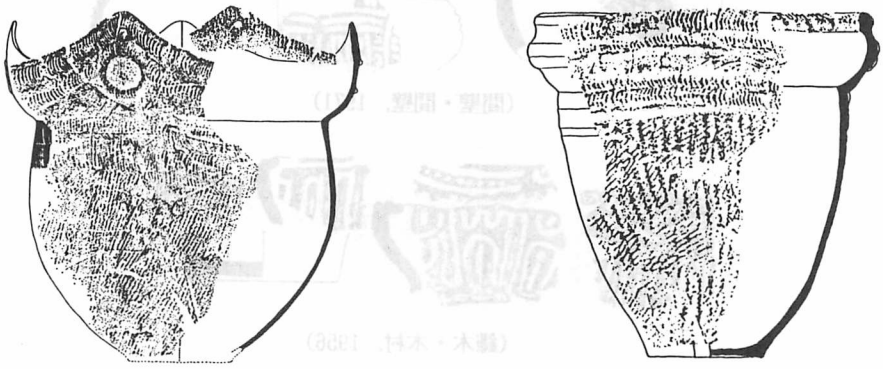


Fig. 1　船元式古段階（間壁・間壁，1971）

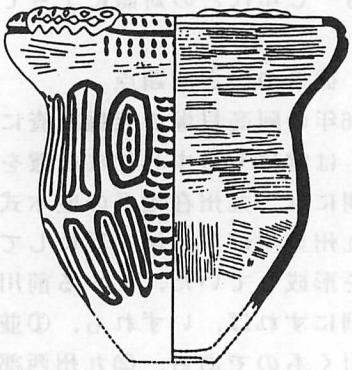
3．九州地方の縄紋中期土器編年修正案

並木式・阿高式と曽畑式とを同系統と見る大きな根拠の一つであったのは，胎土に滑石を混ぜる土器製作の手法が両者に共通する点であったが，曽畑式と並木式・阿高式とを繋ぐはずの曽畑式系の新しい段階の土器には，実は滑石の混入が認められない（水ノ江，1990）。しかも，曽畑式と並木式・阿高式とは器形も紋様帯も全く異なっており，系譜として連続するものではないことは明らかである。

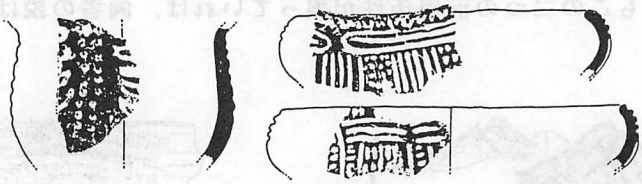
また，中期全般を通じて並木式・阿高式文化圏であるとされてきた九州西部において，福岡西南部・佐賀・長崎・熊本などの各地で，中期初頭～前葉の船元式古段階（鷹島式～船元Ⅱ式）の単純資料が知られるようになってきた。しかも，これら船元式古段階と並木式・阿高式とは層位的に前後関係で押さえられる例があり（本渡市教委，1993等），明らかに前者の方が後者より古く位置付けられる。

したがって，少なくとも中期初頭～前葉には九州西部も船元式の文化圏であり，並木式・阿高式はこれより新しい時期の土器型式であると言える。

（中原・渡辺，1957）



（河口，1988）



（間壁・間壁，1971）

（鎌木・木村，1956）

Fig. 2　春日式古段階・船元Ⅲ式E類・「福田C式」

一方，南九州における前期末の土器型式とされてきた春日式が，最近の新資料の増加によって船元式系土器が在地化したものと考えられるようになり，東（1989・1991）は春日式を4段階に細分して中期中葉～後半に位置付けた。矢野（1993）も東の案を支持し，キャリパー器形の喪失と紋様帯の上退という春日式の型式変化の方向性から，直行口縁で紋様帯が口縁部に限られる「大平式」を経て並木式が成立するとした。

春日式の分布は北部九州にも及んでおり，並木・阿高式より下層から出土する例（池水，1966等）がある。また，矢野が指摘するように船元Ⅲ式E類と春日式古段階の沈線紋土器とは同類であり，西部瀬戸内や北部九州でいわゆる福田C式とされる沈線紋土器も，これと同じものかやや後出するもので，春日式古～中段階との関連で理解できる。したがって，春日式の新段階を中期後半とする位置付けは概ね妥当なものであり，並木式が春日式新段階より更に新しいものであれば，中期でも終末に近い時期を与えざるえない。

春日式新段階と並木式とは，東や矢野のいう「大平式」を通じて型式学的に連続するが，この「大平式」は宮崎県大平遺跡出土土器（茂山，1957）とは若干の差異があるため，鹿児島県中尾田遺跡第Ⅲ層第Ⅲ類土器（鹿児島県教委，1981）に代表させて中尾田Ⅲ類と呼ぶことにする。並木式を特徴づける押引紋や凹線紋の出自はこの中尾田Ⅲ類の中に求められ，田中（1979）が想定した並木Ⅰ式～Ⅲ式の型式変遷は否定される。並木式は押引紋を喪失して阿高式へと変化するが，阿高式に後続する時期は中津式の新段階に並行するらしいので，中津式・称名寺式の成立をもって後期とする立場をとれば，阿高式の新しい段階は後期初頭に位置付けられる可能性が強い。

以上の点をまとめると，九州西半部の縄紋中期土器編年は次のように修正される。

中期初頭～前葉：船元式土器古段階（鷹島式～船元Ⅱ式土器）
中期中葉：春日式土器古段階
中期後半：春日式土器新段階
中期末：中尾田Ⅲ類土器
中期末：並木式土器
中期末～後期初頭：阿高式土器

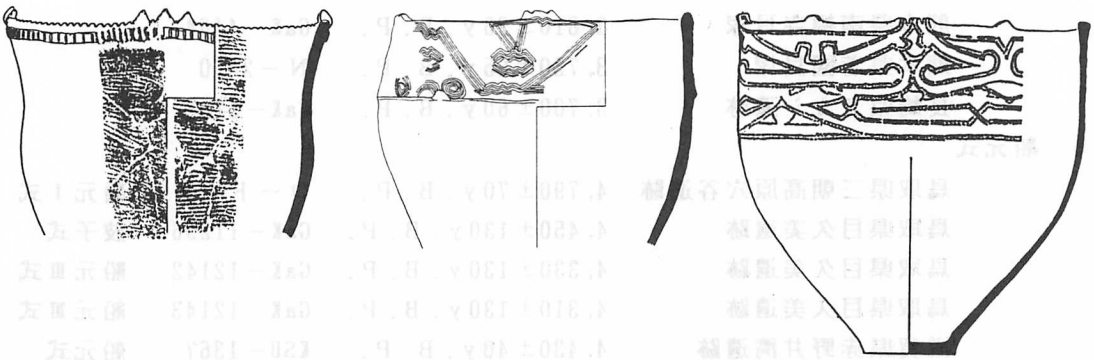


Fig. 3　春日式新段階（左；姶良町教委，1977）・中尾田Ⅲ類（中；鹿児島県教委，1981）・並木式（右；富田，1981）

関連する^{14}C年代測定値

春日式			
鹿児島県成川遺跡	4,320±40y.B.P.	コード不明	
鹿児島県前谷遺跡	4,010±90y.B.P.	KSU−1157	
鹿児島県前谷遺跡	4,100±90y.B.P.	KSU−1158	
鹿児島県前谷遺跡	4,040±90y.B.P.	KSU−1159	
中尾田Ⅲ類			
鹿児島県出口遺跡	3,960±40y.B.P.	コード不明	
鹿児島県出口遺跡	3,850±35y.B.P.	コード不明	
佐賀県平原遺跡	4,580±140y.B.P.	Gak−16540	
佐賀県平原遺跡	4,700±120y.B.P.	Gak−16541	
並木式			
佐賀県平原遺跡	4,150±100y.B.P.	NUTA−2262	
(不明)	3,970±50y.B.P.	コード不明	
阿高式			
長崎県ヌカシ遺跡	4,080±40y.B.P.	GaK−5209	
長崎県ヌカシ遺跡	3,470±60y.B.P.	GaK−5210	
熊本県轟貝塚	4,065±135y.B.P.	コード不明	
熊本県轟貝塚	3,960±175y.B.P.	N−317	
熊本県轟貝塚	3,960±130y.B.P.	N−318	
熊本県尾田貝塚	3,970±50y.B.P.	GaK−4842	
熊本県尾田貝塚	3,690±50y.B.P.	GaK−4841	
熊本県尾田貝塚	3,640±130y.B.P.	GaK−5821	
熊本県尾田貝塚	3,750±130y.B.P.	GaK−5822	
熊本県尾田貝塚	4,120±150y.B.P.	GaK−5823	
熊本県尾田貝塚	3,950±130y.B.P.	GaK−5824	
南福寺式・坂の下式			
佐賀県坂の下遺跡	3,849±78y.B.P.	KURI−0049	
熊本県南福寺貝塚	3,810±95y.B.P.	GaK−4464	
熊本県若園貝塚	3,720±65y.B.P.	N−2860	
長崎県ヌカシ遺跡	3,700±60y.B.P.	GaK−5208	
船元式			
鳥取県三朝高原穴谷遺跡	4,790±70y.B.P.	コード不明	船元Ⅰ式
鳥取県目久美遺跡	4,450±130y.B.P.	GaK−11296	波子式
鳥取県目久美遺跡	4,330±130y.B.P.	GaK−12142	船元Ⅲ式
鳥取県目久美遺跡	4,310±130y.B.P.	GaK−12143	船元Ⅲ式
滋賀県赤野井湾遺跡	4,430±40y.B.P.	KSU−1367	船元式
滋賀県赤野井湾遺跡	4,490±40y.B.P.	KSU−1368	船元式

4．修正編年案と^{14}C年代測定値

縄紋時代中期の^{14}C年代は，関東地方で4,800～4,050ｙ．Ｂ．Ｐ．，東北地方で4,600～4,000ｙ．Ｂ．Ｐ．とされる（キーリ・武藤，1982）。一方，九州地方の縄紋中期の^{14}C年代は関東・東北の年代より遥かに新しい．このことは，関東・東北と九州とで縄紋中期とされる土器が，実際にはかなり異なる年代に使用されていたものであることを意味する。学史に従えば、早期・前期・中期・後期・晩期の５大別（あるいは草創期を加えた６大別）は，山内清男（1937）による関東・東北の型式を基準とした区分であるので，九州の中期土器が関東・東北の中期土器と並行しないならば，九州で中期とする型式の位置付けが間違っていることになる。

そこで，並木式・阿高式を中期末～後期初頭とする修正案と^{14}C年代測定値とを照らし合わせると，編年の序列についても，九州以外の地域との年代も整合的であることが解る。よって，九州地方の縄紋中期土器編年は，従来の説よりも修正案の方が^{14}C年代とも矛盾がなく，正しく実態を表しているものと考える。

謝辞：小文は，1994年１月17日・18日に行われた1993年度名古屋大学年代測定資料研究センター主催の加速器質量分析年代測定シンポジウムでの発表内容である。土器型式の検討を主として徳永が担当し，両名の討議を経て高瀬が口頭発表を行った。この中でも引用した佐賀県平原遺跡採取試料のＡＭＳ法^{14}C年代測定に便宜を図っていただき，発表の機会を与えていただいた，名古屋大学年代測定資料研究センター及び，中村俊夫先生に厚く御礼を申し上げる。

引用文献

姶良町教育委員会（1977）南宮島遺跡．鹿児島県姶良町

池水 寛治（1966）鹿児島県出水郡江内貝塚．日本考古学年報，14，pp.115－116，日本考古学協会，東京

大根占町教育委員会（1988）出口遺跡．大根占町埋蔵文化財発掘調査報告書（２），鹿児島県大根占町

鹿児島県教育委員会（1981）九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅶ　中尾田遺跡．鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（15），鹿児島

鎌木 義昌・木村 幹夫（1956）中国．日本考古学講座，３，pp.188－201，雄山閣，東京

河口 貞徳（1988）日本の古代遺跡38　鹿児島，保育社，大阪

キーリ C.T.・武藤 康弘（1982）縄文時代の年代．縄文文化の研究，１－縄文人とその環境－，pp.246－275，雄山閣出版，東京

佐賀県教育委員会（1993）平原遺跡Ⅱ．佐賀県文化財調査報告書第120集，佐賀

坂田 邦洋（1979）^{14}C年代からみた九州地方縄文時代の編年．別府大学考古学研究室報告第２冊，広雅堂書店，別府

茂山 護（1957）串間市大平出土の縄文式土器．九州考古学，１，pp.１－２，九州考古学会，福岡

田中 良之（1979）中期・阿高式系土器の研究．古文化談叢，第６集，pp.１－52，九州古文化研究会，北九州

富田 紘一（1981）九州地方．縄文土器大成，第３巻中期，166－167，講談社，東京

中原 志外顕・渡辺 正気（1957）福岡県筑紫郡針摺出土の縄文式土器．九州考古学，２，pp.11－12，九州考古学会，福岡

東 和幸（1989）春日式土器の型式組列．鹿児島考古，第23号，pp.38－45，鹿児島考古学会，鹿児島

東 和幸（1991）鹿児島県における縄文中期の様相．南九州縄文通信，No.５，pp.35－46，南九州縄文研究会，鹿児島県姶良町

本渡市教育委員会（1993）熊本県本渡市大矢遺跡調査概報．本渡

間壁 忠彦・間壁 葭子（1971）里木貝塚．倉敷考古館研究集報，第７号，倉敷考古館，倉敷

埋蔵文化財研究会鹿児島集会実行委員会 編（1987）絶対年代測定値集成．第22回埋蔵文化財研究集会－火山灰と考古学をめぐる諸問題－，第Ⅱ分冊，鹿児島

前川 威洋（1969）九州における縄文中期研究の現状．古代文化，第21巻第３・４号，pp.55－62，古代学協会，京都

松山町教育委員会（1986）前谷遺跡．松山町埋蔵文化財発掘調査報告書（１），鹿児島県松山町

水ノ江 和同（1990）西北九州の曽畑式土器．伊木力遺跡，pp.449－471，同志社大学考古学研究室，京都

矢野 健一（1993）縄文時代中期後葉の瀬戸内地方．江口貝塚Ⅰ，pp.157－175，波方町教育委員会，愛媛県波方町

山内 清男（1937）縄紋土器型式の大別と細別．先史考古学，第１巻第１号，pp.46－49，先史考古学会，東京